79
406

法學博士天野爲之序

勞働新聞記者 小林肱水著

信用經濟論

勞働協會藏

79-406

信用經濟論

序

『ルエル』曾て曰く『若し世に所謂る共有主義にして行はるあらん乎、人口は蕃殖し、生産は減少し、爲めに今は一千人の富者と百萬人の貧者とより成立せる社會は五六十年の後は二百萬人の貧者より成り立ち、復た一人の富者を見ざる事となり、社會を擧けて不幸と缺乏を感せん、過度の時期に於ける瞬間の快樂を公衆に與ふる爲めに、社會は未來永劫、貴重すべき有形物を失ひ貴重すべき無形物を失ひ、唯だ芋と酒と色とに滿足するの外なきに至らん』と。想ふに『信用經濟論』の旨意亦此に在るが如し、而して著は世の淺薄なる共有論を排すると同時に、夫の生産

明治
23 8 8
交内

の發達と兩立し得るの一種の新策を建つ、曰く信用の利用即ち是なり。顧ふに古今分配を論ずる者多くは是れ「寡きを憂へず均からざるを憂ふ者」「高きを抑へて低きを擧げんと欲する者」「分配の公平を計る爲めに分配すべき貨物の增加を犧牲とするを惜しまざる者」。然るに今此の穩健の著あり、吾輩眞に空谷跫音の想あり。世の社會問題を論ずるの人士に取りても、有益にして多趣味の好文字なるを信ず。欣然筆を走して以て序となす。

法學博士　天野爲之

信用經濟論自序

道說恒產なくんば恒心なしと、經濟は即ち倫理の大本なり。省よ、吾人は自から萬物の靈長なりと云ふと雖衣食足らざれば禮節を知らざるなり。以ある哉、社會人文の發達が常に物質的より精神的に向上することや。

夫れ經濟は倫理の大本なり。別言すれば社會最大多數者の產業上狀態は一國政敎の地盤たるが故に社會の最大幸福を望まんには先づ最大多數者の物質的事情を改善せざるべからず。貧困は墮落の誘惑にして富裕は向上の指導なり。莊子曰く、『水之積也不厚則負大舟也無力』と。試に杯水を凹堂の上に覆へして杯を之に置けば則ち膠す、水淺くして舟大なればなり。社會經濟の理亦一のみ。富の積ること深厚ならずんば社會の貧困墮落を救濟するや力無きなり。低事ぞ、孔子一たび『不憂其寡患其不均』と說くや。水の淺に處りて大舟を負はんとする者數々然として輩出す。獨逸にカール、マルクスあり、北米にヘンリー、ジョルヂありて眇たる一粟の有餘を以て天下の大に奉せんとしたるも、黑潮は竟に逆流せず。社會が貨

幣經濟より信用經濟に向上するや、貧者と雖企業心あらば信用の力に依りて小資本を以て其の勞力を活動せしむることを得るに至り、社會は冥々の間に其の生產を增大し、社會的富の積は自から深厚となれり。然れども禍なる哉、一得あれば一失相伴ふ。信用を利用することの餘りに容易に過くる時は妄動知詐の弊此に起り却て無用の消費を奬勵し資本を不生產的に減少し終に社會經濟を混亂す。我國現時の不景氣困頓は實に其の中毒なり。アヽ社會か貨幣經濟より信用經濟に向上するに從て利害相漸毒することは是の如し。成敗の理、深く察せずんばあるべかす。乃ち自から揣らず此に『信用經濟論』の小著あり矣。

明治卅五年夏七月勞働協會に於て識す

肱水漁長

再版に臨みて

如今、資本家も勞働者も各々內に其の常操を守りて生殖を勵まざるべからざるの時に方り、貧富稍もすれば相淺轢して國富の增大を阻害せんとす、正に是れ識者の省察を要するの時、吾先づ書劍を典じて本著を再梓に付す、蓋し時艱を拯はんが爲めなり。

日露開戰後六月南品川七號砲臺畔の僑居に於て

著者識

信用經濟論目次

第壹章　消費と生産……一頁

事物の進發生長は比例ならざるべからず。富貴閑暇自由を上下同一比例に置くべし。貧困救治策は社會の上下を一貫せる問題なり。有餘を損して不足を補ふは富の移轉なり。ヘンリー、ジョージの土地共有論。老子張弓説の誤謬。欲人蛇足の空論。生産と分配。經濟上の不可分。生産的富と消費的富。生産的富の集合は消費的富の分配を普及せしむ。高價なる貨銀は生産を增加す。誤解の主原。

第貳章　勞働と資本……八頁

カール、マルクスの資本論。資本掠奪論の誤謬。資本は勞働を蓄積したる者にあらず。勞働は人類の勢力なり。勞働の消費的性質。生産物に對する勞働者の分配。資本は勞働を剝奪せず。資本最大の土地は貨銀最高なり。社會の進歩は生産的富の分量に比例す。

第參章　資本と信用……十七頁

資本家の斷見。資本は勞働より廉價なり。資本の廉價は報酬の大なるに由る。手工は賃銀低價なるも生産物高價なり。高價なる賃銀は機械の使用を勵し生産物の價格を廉ならしむ。賃銀低廉なる國には資本の使用なし。高價なる賃銀は二途より機械の使用を勵す。眞正賃銀は任意に騰貴せしむる能はず。賃銀自然の騰貴は常に次第を逐ふ。利益に及ぼす賃銀騰貴の結果。賃銀騰貴は資本家の不利にあらず。消費額の增加。生産的富の增加を促す。富の積厚からざれば社會の貧困を救治する力なし。富は遲なく資本は遲あり。資本は限りあるが如く遲なきに似たり。信用又資本なり。信用は貨幣の作用をなす。無資産者と雖信用によりて勞力を活動する事を得。信用は有益の消費を勵す。高價賃銀と信用經濟。

第四章　信用と保障……三十頁

信用は生産を助く。信用の價値。信用濫用の弊。經濟上の一大恐慌。辯に惑ふの俗。信用保障。信用經濟の不備。株式會社の監査役。公共監査機關の必要。監査は獨立ならざるべからず。信用經濟の發達を助長す。社會經濟の大計。

信用經濟論

第壹章　消費と生産

小林肱水著

事物の發達生長は比例ならざるべからず。富貴閑暇自由を上下同一比例に置くべし。貧困救治策は社會の上下を一貫すべき問題なり。有餘を損して不足を補ふは富の移轉なり。ヘンリー、ジョージの土地共有論。老子張弓説の誤謬。歌人蚤上の空論。生産と分配。經濟上の不可分。生産的富と消費的富。生産的富の集合は消費的富の分配を普及せしむ。高價なる賃銀は生産を增進する。繁榮の主原

道説『堅强者死之徒、木强則共强大處下柔弱處上』と。事物の生存發達は比例ならざるべからざるは眞理なり、其の頂點を增大せんと欲せば先づ其の基底と廣狹大小を比例せざるべからず、若し基底と頂點との大小廣狹が比例ならずして强大上に處り柔弱下に處らん乎、是れ死の徒、其の存立は危殆なり。社會生存の理も亦一なり、全體を進歩せしめずして或一局部をのみ進歩せしむる能はざるや論なし。故に曰く『上流社會が漫に享有する富貴閑暇自由を以て下層社會の貧困を救治し、其

の富の量と閑暇自由とを上流社會と同一比例に置くを得て始めて上流社會の安寧幸福を保つべし』と。社會の頂點を威嚇するの危險は其の基底の發達を怠るとと共に倍々加はるを知らば、如何に貧困を救治すべき乎との問題は獨り下層社會の爲にのみ解決せらるべき者にあらざるを知らんなり。敢て問ふ、如何に貧困を救治すべき乎。他なし、富を增加するに在り。君見ずや、下層社會は人口の幾んど八割を占むを。是れを救ふに分配の方法を以てし、彼の有餘を損じて此の不足を補ふも決して貧困を減ずるを得ざるべし。古今の富を算するに、如何に分配するも社會の狀態を改良するに足る底の富の未曾て世界に成立せしを聞かず。故に如何に巧に人爲を以て利潤地代利子等を改廢するも到底貧困救治の目的を達すると能はず、何となれば此等の方法は富の移轉にして富の增加にあらざればなり。地代は文明の所得を吸收し去る矣と絶叫したりしヘンリー、ジョーヂは地代を共有物となして以て貧困を救治せんと企てたりき。當時或人の調査せし所に觀るに合衆國の地代を全人口に均しく分配する時は一人に就き一日幾んど二仙を與ふるに過ぎずと云へり。一日僅に二仙の富を移轉するの方法は貧困救治の手段として價値を有するや否や頗る怪むべし。

老子曰く『天之道猶張弓乎、高者抑之、下者舉之』と。是れ天道のみを知りて人道を知らざるなり。如何なる方法を以てするも、現在の富を再び分配せんとするは皆ヴ|ヨーヴの徒なり。人道は有餘と損せずして不足を補ふを策の上乘となす故に曰く貧困を永遠に救治せんと欲せば何人をも害するとなく勞働者をして更に多額の富を有せしむるの外なし、而して實際に是れを行はんは富の分量を全体の上に增加するより他に妙策なかるべしと。即ち吾曹が資本家勞働者と共に研究すべき問題は、如何にせば地代を棄て得べき乎如何にせば利潤を減じ得べき乎といふにあらずして、如何にせば社會全体の富を增加し得べき乎といふに在り。今斯の問題を解釋せんには經濟學上の最大問題にして世人の誤解せる富の消費即ち勞働者に在りては賃銀たるべき富の關係を論ぜざるを得ず。生産と分配に關しては屢者も彼屢者も與に全く其の性質を異にするものと誤解せり、彼等は恰も富の生産と分配とは特殊なる二個の經濟力に由て司配せらるゝかの如くに思考せり。曰く社會現在の組織は獨り生産に私して富の分配に害あり今日の急務は富の生産

の增加にあらずして富の分配其の平均を得るに在りと。彼の人爲的專制の計畫即ち利潤地代利子の廢絕論は一に此の誤れる見地より出づ。老子が『天之道損有餘而補不足、人之道則不然、損不足以奉有餘、孰能以有餘奉天下』と云へりしは、富の生產分配の關係を審にせざるの誤謬なり。又本居宣長が『世上の金銀財寶は兎角平等に行き渉り難きは古今の常なり其の中にも今の世は別して貧者愈貧に富者愈富むもの甚しければ上に立つもの富者の手に集る金銀を能き程に散して專ら貧民を救ひ賜ふ樣あらまほしきものなり』と云へりしが如きは歌人が坐ながらの空語、戸を出ずして天下を語るの惑なり。

分配の職分たる生產を離れて別に成立するものにあらず、換言すれば單獨に富の分配を司る職分は社會に成立せざるなり。富なる者は社會各種の人間に由て生產せられ分配せらるゝと雖其の生產分配の區域は無形にして有形の成立をなさゞるなり。重ねて言へは經濟上富の分配は該生產上已むべからざるの結果にして生產を離れて分配なる者有るとなし。若しこれ有りとせば所は慈惠なり、左なくば强奪なり。例へば賃銀を支拂ふは富の分配なりと雖其の分配たるや生產せんが爲めなり、雇主の賃銀を支拂ふは更に多額の富を得んと欲してなり、故に其の職分は富の分配者にあらずして生產者なり、而して其の分配は生產上缺くべからざる結果なりとす、然らば分配は生產上自然の結果にして生產を離れて分配なく分配を離れて生產なきと明なり。分配を增加するとなくして生產を增加し生產を增加するとなくして分配を增加するといふが如きは經濟上無意味の言語なりと謂つべく富の集合は社會に有害なりとの議論は立脚の餘地なきなり。

富に二類あり、生產的富消費的富これなり。一は資本として生產に使用せられ他は直接に吾人の需要に供するものとす。前者は器械船舶家屋等固定的資本として使用せらるゝを以て直接に吾人の需用を滿たす能はず、即ち食物衣服として用ゆる能はずと雖間接に此等需要品を生產するものたり。勞働者及び一般社會が此の固定的富を利用せんと欲せば消費者の爲めには最小額を以て能ふ限り生產物の最大額を此の富より得るに在り、例へば一億萬圓の資本をば大工場を有する一百人の手に握りて製靴業に從事すると小工場を有する一百萬人が所有して同業に從事するとを比較せば前者は職工に與ふるに價高なる賃銀を以てして更に製

糎一足の價をして後者よりも低廉ならしむるを得べし。然らば生産的富は少數者の手に集合するそこ勞働者及び一般社會の爲めに利益なり、是れ今日世界各種の産業に於に日に起りつゝある現象にあらずや。試に印度支那を觀て而して後に英米を看よ生産物の最も廉にして最も豊富所なるは生産的富の最も集合する所たるを知らんなり。然れども消費的富の集合は全く之に反す、其の分配一般なるの比例に從て社會全体の安寧幸福均一なるを得べし。幸よ人文の進歩と共に經濟上社會上分化の勢力は消費的富の集合を抑へて一般に分配せしむ。此の富を集めて何人も利益を得る能はざるを以て何人も初めよりこれを集合せざるなり集合して利益あるは獨り生産的富即ち資本のみ、經濟上の原則として生産的富の集合は其の集合と同時に消費的富の分配をも增加せしむ。慣むべし、世の貪婪無飽なる資本家製造家は此の理を察せずして徒に其生産物を賣るの一事に汲々たり。語を寄す世の資本家製造者よ。公等幷に社會が生産的富の使用に由りて利益を享受するは、公等が其の消費的富を分配處置するの比例に由ると知れ。疑ふらくば眼を大にして世界の大局を達觀せよ、生産的富の最も集合する所は消費的富の生産最も大に、其の分配最も一般なるを發見せん。彼の合衆國及び英國は、資本の集合世界に冠たるにあらずや。今これを大陸に比するに、每一人の生産力は二倍にして以太利西班牙葡萄牙に比すれば五倍、支那印度に比すれば十二倍、以太利西班牙葡萄牙に比して十二倍、以太利西班牙葡萄牙に比して六倍、歐州大陸に比して平均二倍餘なるを見る、而して英國に於ける賃銀の割合は亞細亞諸國に比して約十倍、歐州大陸に比して二倍なり、合衆國に在ては亞細亞の十五倍にして大陸に比すれば平均三倍以上に居れり。（拙著「社會政策之大本」四五六頁を參照すべし）生産的富の最も集合せる比例に從て消費的富は最も豊に生産せられ最も一般に平等に社會に分配せらるゝは經濟上の定則として動かすべからず。此の事實にして資本家及び勞働者の認むる所とならば、産業上社會上の總ての誤解は除却せらるべし。資本家は是に到て低廉なる賃銀は大生産大利益を得べしとの誤謬を棄て、勞働者は生産を遏絶すれば富の分配を增加すべしとの愚見を永遠に絶つなるべし。

第貳章　勞働と資本

カール、マルクスの資本論。資本掠奪論の誤謬。資本は勞働を蓄積したる者にあらず。勞働は人類の勢力なり。勞働の消費的性質。生產物に對する勞働者の分配。資本は勞働を剝奪せず。資本最大の土地は賃銀最高なり。社會の進歩は生產的富の分量に比例す。

カール、マークスは其の著「資本論（ダース・カピタル）」に於て資本と勞働との關係を説明して曰く「世間の財貨若くは交換的價格は總て勞働の結果なり、故に眞正の生產者たる勞働階級は世間の財貨を所有するの權利を有す、此の勞働は獨り肢體に限らず他を指揮監督する頭腦の勞働も亦此の中に屬するものなれども普通の勞働に比すれば難易の別ありて肢體にかゝるものを首位に置かざるべからず、然るに實際は頭腦的勞働者即ち會社重役支配人等は資本に對する配當の外尙ほ多額の俸給を取り職工は格外に下れる賃銀を受くるは甚だ不釣合のとならずや、勿論近代の工業に於ては各種の新器機買入の爲め大資本を要し從て監督者の必要を感ずること愈々大なれども資本は當然總ての勞働者に屬すべきもの彼等が綜合的所有に歸すべきものとす、其の理由如何と云はんに元來資本てふものは掠奪の結果なり、勞働者に與ふべき賃銀中より抂げて引去りたるものに過ぎず、萬一勞働者は何時までも資本に緣故なき者として現在の有樣に據置かるゝものならば是れ彼等は資本家債務者即ち他人の勞働に依賴して生活せる一階級の奴隸と謂ふべきのみ、今後の產業上固定資本を要すること愈々大なれば勞働者の地位愈々墮落すべし是れ實に堪へ難き不條理にあらずや、資本は財主が勤儉貯蓄の結果とは經濟學士の說なれども中等階級の好意を迎合せる阿諛的議論ならんのみ、假りに一歩を讓りて資本是れ貯蓄の結果とせんも這は勞働者より掠奪せしものと貯蓄せしに外ならず」と。是れと資本掠奪論となす。夫れ彼の勞働は萬有の富を作る萬有の富は是れを作りたる者に屬すとの理論が果して正當ならば、いふ迄もなく利潤地代利子は皆これ勞働者の所得を剝奪するものにして、是れが返還を求むるの權利固より勞働者に在りといふべく資本家撲滅も勝手たるべけれど、若し理論の第一命題が非眞理ならん乎、資本掠奪論は勢瓦解せざるを得ず。敢て問ふ第一命題は眞理に副へりや。」歷史上萬有の富が悉く勞働より成りたる時期ありしには相違なし。彼の人類が樹果を摘み野獸を擒にし魚鳥を捕へて以て生活せし時代の如きは萬有の富は悉

く勞働者の有なりしなり。此の時に當りてや、何人が地主たり資本主たり將た政府たる者ぞ、既に政府なし資本主なし地主なし、隨て地代利子租稅と納むるの要なく勞働者は萬有の富を造り萬有の富を受けしと雖、其の富の額は極めて尠少のものたりしなり。約言すれば世界最貧の時代なりしなり。降りて人類が人力に代ふるに他の勢力を以てするの利益を覺知するの比例と共に富の額は增加し來れり。試に想像せよ、原人時代の獵父赤手以て野獸を捕獲すれば一ヶ年の平均所得三百頭に過ぎず、若し弓矢を作ると二ヶ月ならば他の十ヶ月間にして野獸四百頭の所得ありと。借問す、此の四百頭は人力の生產なる乎、曰く否らず、人力の生產は三百頭に過ぎざるとは事實の自明する所にして他の百頭は弓矢の力に是れ由る、弓矢は則ち資本なり。或は云はん、弓矢ありと雖、人力之に加はらざれば百頭の餘剩を得ざるべしと。然り、弓矢なければ勞働者亦此の百頭を得る能はざるは經驗の証する所たり。彼は何故に弓矢を作る乎、同一の時間に於て資本を用ゐると用ゐざると其の所得の額に等差なしとすれば恐くは之を用ゆる者あらざるべし、彼が弓矢を作るは一ヶ年百頭の報酬を與ふるが爲めなり。復或は云はん、弓矢(資本)は彼に益する所なし、何となれば弓矢を作るの勞力は單に勞力の形狀を異したるに過ぎざればなり、換言すれば資本は勞働を貯へたるものゝみと。吁是れ誤謬の因て生ずる所、其の枝葉の千差萬樣は則ち此に眡る矣。

勞働とは何ぞや。人類の勞力のみ。人類の勞力は人類以外に之を貯藏する能はず。如何に健康の人と雖上半年を怠惰に過せしとて、後半年に二倍の勞力を熟練を出すと能はざるべし。是れ勞働者が其の勞働を貯ふる能はざる所以にあらずや。勞働者若し一日其の勞力を賣る能はざれば永久一日の勞力を損せん、彼の勞働者が無爲無職を慊ふは允に所以あり。

人類の勞力を人類以外の物に貯ふるは到底不可能のことたり。人力にして他物に其の力を費したる後は人力は永久人を離れたるなり、若し此の力を正當に使用せば以て富を生ずべく、然らずひば空しく消亡ずべし此の力にして弓矢の形狀を以て富を生ずる時は弓矢は勞働にあらず勞働の生產物なり、人力を有形物の上に費したる結果として產出したる一個の新生產物なり。彼の綿布と其の職工と相異なるが如くに弓矢と人の勞力其れ自体とは全く別物なり。

人力は有形物の中に貯へらるゝと假定するも何人も有形物に由りて該力の產出せらるべしとは主張せざるべし。故に此の勞力貯蓄論が主張する所は一物を作る爲めに費したる人力の量は該物体に移されて保存せらると云ふに過ぎず若し二ヶ月間の勞力を以て弓矢を作る時は此の弓矢に由りて產出せらるゝものは唯二ヶ月の勞力のみ、而して若し二ヶ月間の勞力を弓矢に用ゆるとせば他の獵に用ゆる勢力は唯十ヶ月間のみ、吾人は經驗に由て他の補助なき勞力は一ヶ月二十五頭の獵を爲し得るに過ぎざるを知れり然らば十ヶ月間にして二百五十頭なり然るに今勞働と弓矢と結合すれば十ヶ月にして四百頭を得百五十頭の增加は單に弓矢のみに歸すべからず何となれば二ヶ月の勞力は弓矢を造るに費されたればなり然らば五十頭を以て二百五十頭に加へたる三百頭は全く人力の結果にして他の百頭は矢弓に結合せる自然力の結果と云ふべし吾人は如何に考察するも百頭の增加は資本是れを生じたるものにして勞力にあらざるを見るなり更に一歩を進めて之を說かんに、又爰に弓矢を作ると巧なる甲獵父ありと假定せよ、此の人他の乙獵父に諭りて曰く吾は足下より一層好良なる弓矢を作るを知る足下は吾に比して獵に巧なり足下若し其の獲得の四分の一をは吾に與ふることを肯ずるならば吾は足下に假すに吾の弓矢を以てせん思ふに足下は一年當に六百頭の獵を為し得べしと、乙獵父は甲獵父の言を容れたり、其の結果乙獵父は弓矢(資本)を供給せし甲獵父に獲得の四分の一を與へて自から四百五十頭を得たり。此の場合に何人か損害を受けたる乎、何人も損害を受けたる者なし。勞働者は富の全額を得べしとは實際なり。然るに今彼は唯四分の三を得、然れども全額を得れば即ち三百頭を得四分の三を得れば即ち四百五十頭を得、是れ其の生產の全額二倍したればなり、此の生產の增加は勞力を用ゆるの度增加したるにあらず、六百頭を得るの勞力は三百頭を得るの勞力に異ならざるなり、果して然らば此の增加は資本の使用に歸せざるべからず。

富を生ずる悉く人力を以てし而して富の全額を受くる時は六分の五即ち四百頭を得、富の半額を產出する時は四分の三即ち四百五十頭を得。由是觀之勞働者は資本の爲めに益するあるも損するとなきや明なり。資本を用ゆること大なれば隨て其の享受する利益亦大なりと知るべし。

生產の世界如何に復雜を極むるも此の理は一のみ。君見ずや、富を生產するは二個の動力に基くことを。一は人類の勢力にして他は資本てふ有形物より生じ來る自然力(蒸氣電氣力等)なり、前者は遲緩にして其の力細小是れを增さんとするも限りあり、後者は迅速精密にして無限に其の力を增大するを得べし。故に富が單に人類の勢力に由てのみ生產せらるゝ間は其の價高くして其の量寡し、人力は微にして粗なり自然力を使役して富を生ずるに至て生產限りなく物價低廉多數人民は物質的に繁榮し社會的に開明の度を進むべし。印度に在りては富を生ずる多く人力に依る人口每一人年々の平均所得は金貨二十弗に過ぎず之に反して合衆國は一人の平均百六十五弗なりと云へり。英國に在りては生產力の七割八分は蒸氣力之と供給するに反して、魯國は僅に一割に過ぎず。英米に在りては人力に依賴するもの四分に過ぎざるに。西班牙に在りては二割四分、以太利に於ては三割四分、葡萄牙は四割二分なりとす。

生產に於ける自然力人力使用の差異に關しマルホール曾て云へるとあり、曰く六人の英人六人の米人の結合せる生產力は、佛獨の二十四人に比すべく、墺地利の三十二人に、西班牙の五十人に、以太利の七十五人に、葡萄牙の八十四人に比すべしと。故に英國に於ける一般の賃銀比例は大陸諸國に比すれば幾んど二倍にして米國賃銀比例は幾んど三倍なり。

畢竟勞働者は資本の使用より常に得るあるも失ふ所なきなり。是れ資本主の寬仁なるが爲めにあらず、經濟上自然の原則よりして資本は其の報酬を得る場合に非ざれば使用せられざるが爲めなり、換言すれば資本は社會の富を剩奪するに反して更に多額の富を社會に附與するの場合にあらざれば使用せられざるなり。若し然らずとせば社會の進步は竟に期すべからず、何となれば人類の生產力は限りありて無限に增加すべからず、故に或他の力を假りて富の生產を助くるにあらざれば人類は永遠に貧困野蠻の狀態を脫するとを得ざるべし。看よ自然力を使用せざる國に在りては常に貧困野蠻なるにあらずや。更に復言へば勞働者が其の生產よりもより多額の消費をなし得るに至るは單に資本が其の消費よりも多額の富を生產するに由る、而して社會の進步は是に於て始めて之を望むべし。

世の資本家勞働者よ、公等如何に頑冥なりと雖論じて此に至らば原人時代と除くの外は勞働が萬有の富と造るものにあらざるとを了解したるならん。而已ならず勞働者が社會に於ける狀態は萬有の富を得る時に於て最も幸福にあらざりしとをも了解せしならん。乃ち知る富の生産は勞働と資本の結合に由るとを、而して勞働に由て生産せらるゝ富の全額が減少すると同時に勞働者が享受する富の額は却て增加するとを。故に社會の安寧幸福の增進は人力に代ふるに自然力を以てするに在り、而して其の增進の度は世界に生産せらるゝ富の分量の比例に應ずる者なり。

第參章　資本と信用

資本家の斷見。資本は勞働より廉價なり。資本の廉價は報酬の大なるに由る。手工は賃銀低價なるも生産物高價なり。高價なる賃銀は機械の使用を動し生産物の價格を廉ならしむ。賃銀低廉なる國には資本の使用なし。高價なる賃銀は二途より機械の使用を動す。眞正賃銀は任意に騰貴せしむる能はず。賃銀自然の騰貴は常に次第を逐ふ。利益に反ぼす賃銀騰貴の結果。賃銀騰貴は資本家の不利にあらず。消費額の增加。生産的富の增加を促す。富の積厚からざれば社會の貧困を救治する力なし。富は溢なく資本は溢あり。資本は限りあるが如く溢なきに似たり。信用又資本なり。信用は貨幣の作用をなす。無資産者も唯信用によりて勞力を活動する事を得。信用は有益の消費を勵ます。高價賃銀と信用經濟

資本と勞働との經濟上の關係に就て社會家勞働者等が懷抱せる斷見は前篇に於て論難し悉したれば最早彼等は廣く資本を使用するとの其れが富の大生産上缺ぐへからざるを認むるに於て異議なかるべく、又賃銀の高値と物價の低廉なるとは生産上廣く自然力を使用するに伴ふべきことをも認知せるならん。然れども改良機械の普く使用せらるゝに至るの原因如何といふの問題に對しては資本家亦社會家勞働者等が富の生産に對する經濟上の關係を誤解すると異る所あるを見ず、彼等は機械の使用は全く自家の克己と鋭敏の致す所となし、勞働者が高價なる

賃銀を得(消費者が低廉なる物品を得)社會の安寧幸福が增進し得るは自家が勤儉貯蓄以て改良機械に其の資本を投下するの智力を有するに由れるが爲めなりと自認せり。然れども少しく斯の問題を講究せば富を生ずるものは單に資本家なりとの誤謬は恰も勞働者は萬有の富の生產者なりとの斷見と擇ぶ所なし。夫れ彼の機械に資本を利用するは多數人民消費の增加(消費の增加は高價なる賃銀を意味す)に由て之をなし得る者にあらずや。最小の勞働を以て其の需要を滿足せんと欲するは人類一般の通性なり。既に論したるか如く人力自然力の二者資本と勞働)相合して以て富を生產する者なるか故に、人類は最も容易に富を得べき場合にのみ其の勞働を用ゆべきは自然の理なり。是れを原人時代の獵父に看よ、弓矢ありと雖些の益する所なくむば何ぞ時間を費して以て之を製作するの愚をなさんや。富を得る專ら交換の方法を以てする複雜社會に在りては何人と雖同一の品質數量ならば其の最も廉價なる者を擇ぶなるべし、故に甲の物品にして乙より廉なる時は甲は直に乙を壓倒し、其の結果乙を生產する方法を不用に歸せしむるに至るべし、必ずしも時と所とを問はず勞働(人力)資本(自然力器械等)の二者孰れか最も廣く富の生產に使用せらるゝかは此の二者孰れか最も低廉に富を生產し得るかの事情に歸着すべし。

資本か富の生產上一の要素たるは他なし、資本は人力に比して一層低廉に富を生じ得ればなり。何人も其の使用に由て益する所あらずむば其の資本を生產に投せざるべし。社會が富の生產上改良機械を需要し資本家が之を使用するは其の使用に由り同一勞力を以て一層多額の富を得ればなり、然らずむば誰か又之を用ゆる者あらんや。改良機械を水道に使用するに至るは唯其の生產の報酬增加するに由るのみ。

報酬增加とは富の生產上資本を適用して該生產增加の割合資本適用の比例に超過するの謂なり。是れ成効せる事業の各歷史に就て說明するを得べし、例へば一千八百三十一年米國に於ける綿花業に就て綿布製造に使役せる職工一人に對し投じたる資本は六百五十一弗にして一人に對する織物の生產額は年々九万五千六百七十封にして資本金一弗に付き百四十六封の割合なりしが一千八百八十年には此の業に投ぜられたる資本は職工一人に付き千二百七弗にして一人に對す

る織物の生産額は年々三十五万千九百四十七封にして一弗に付き二百九十一封の割合なりとす知るべし一千八百八十年各職工一人に付改良機械に投じたる千二百七弗を彼の一千八百三十一年職工一人に六百五十弗を投じたる時に比して其の生産は九割九分の増加をなしたることを此の過大なる報酬の増加に由りて勞働者は多額の賃銀を得消費者は低廉の織物を得資本家は利益の割合を減するも其の所得の全額を幾倍するを得たるにあらずや。

生産力として自然力を人力より廉ならしむるは即ち是れ各人に對する富と文明の價をして貧困野蠻よりも低廉ならしむるなり。故に如何に資本の報酬を増加すべき乎而して如何に機械の使用を普及せしむべき乎は實に社會と貧困の問題を解釋すべき管鍵なりと云ふべし。然らば生産上報酬を増加せしめて自然力の使用を一般ならしむるに必要なる社會の事情は奈何。

自然力を制馭して生産に使用せんと欲せば資本の使用に依らざるべからず。勞働者は報酬なき生産に其の勞力を假さゞると同しく富の所有者が資本を投ずるは報酬を得むが爲めなり。資本を投じて報酬を得むが爲めには資本家は三者其の一を擇ばざるべからず。(一)勞働者に低廉なる賃銀を與ふる乎。(二)生産物に對して消費者に多額の價を課する乎。(三)一時に多額を生産する乎、に在り。第一は爲し得べからず何となれば勞働者は手工に由て得べき賃銀より低廉にては資本家の爲めに勞働せざればなり。第二亦然り消費者は手工にて製造せられたる物品より高價にては器械製作品を買はざるべし。故に資本家が資本を投じて利益を得るは唯第三の方法あるのみ。是れ資本家が機械に其の資本を投じて一時に多額の富を製造せんとする所以なり。此の方法や曾に報酬を増加するのみならず他方に於て富を生産するの費用を減ずべし。然れども社會上經濟上に成効を期せんとするには更に必要なる一個の事情あり。何ぞや。曰く增加したる生産物を悉く賣捌かざるべからざるとこれなり。若し生産物にして悉皆賣捌けざる時は該物品は徒費せられて人類の需要を充たす能はず。空しく消費し去るの富は經濟上恰も生産せられざると異なるとなし。此の原理の運動を說明するが爲めに試に想像せしめよ或社會に於ける生魚の消費が一日に十貫目なりとせん而して此の十貫目の生魚を得るには一日一圓として十人を要すと假定せん此の割

合を以て生魚の價は百貫目十錢ならん、更に想像せしめよ、小舟網等を用ゐて魚釣に代へ同一人數を以て一日三十貫目の生魚を得るとし而して小舟等は二ヶ年間使用に堪ゆるものと假定し此等器具を製作するに一年間四人の勞力を要すとせば小舟網等を作るに毎日二人を使用するに均しからん、器具を作るに如是二人の勞働を生産に歸する時は生魚の漁獵額をして二十割丈增加せしむべし、此の方法に由て漁獵せられたる生魚が悉皆賣捌かるゝものとせば生魚の價は百目十錢より四錢に低落すべし、然れども生魚の消費僅に二十貫目ならん乎、三十貫目を漁獵するの價は此の二十貫目の賣上金額より支拂はざるべからず、此の場合には消費せられたる二十貫目は百目に付き六錢ならざるべからず、若し消費額十貫目に止らん乎百目十二錢ならざるべからず。生魚の消費不活潑なると是の如くむば寧魚釣を用ゆるの却て百目に付き二錢を減ずべし、然れども消費額一日二十貫目に上る時は小舟網等に二人の勞働に對する資本を投じて生魚の漁獵二倍し消費者は四割低價の魚肉を得若し消費額一日三十貫目に上る時は同一資本を以て三倍の漁獵を得るが故に生魚の價は六割減ずべし。故に消費小(賃銀低廉)なる時は自然力(器械)は手工の生産より不經濟なるを知るなり。之に反して消費增大(賃銀騰貴)するに共に資本の使用に對する報酬の增加始めて望むべく而して其の結果自然力の生産は人力の生産より一層低價なるを得べし。是れを以て觀るも社會の實利上生産の改良方法を應用し得るに至るは社會の多數が富を消費するの度の增加するに由るなると知るに足るなり。

所謂社會が富を消費するの度の增加とは他方面に於て賃銀の增加を意味す。故に賃銀の增加及び勞働者の改良せる社會的事情は資本家が其の資本を機械に投じて廣く是れを利用せんとする克己と智力とに由るにあらざるなり。語を換へて云へば資本家の所得は全く多數人民が富と消費すべき經濟上能力の發達に由るなり。

米國に於けるエジデアンエキスモーパタゴニアン等の野蠻種族は資本の必用と感せずと云へり。此等種族の中に在りては資本家は到底生存するとを得ざるなり何となれば彼等は富を消費するの能力乏しきが故に近世の改良機械を以て富を生産するの必要なければなり。印度支那に在りては人民の消費稍大なるを以

て資本家は辛じて生存し得らるゝと雖其の數甚だ多からず。魯西亞(埃太利西班牙等に在りては賃銀頗る高く獨佛に至りては賃銀は更に前數ヶ國の上にあり英米に至りては各人の賃銀及び消費は世界の第一位に居ると稱せらる矣。

賃銀一般に其の割合を增加する時は自然に生産の改良機械使用を二途より奬勵す即ち賃銀の增加は曾に消費の增進に由りて改良機械の使用を促すのみならず同時に勞働の價を增加すべき傾向に由りて之を奬勵するに至る。如是消費の能力旺盛なるに至りては生産せられたる富の價を減ずると同時に其の分量を增加するが爲めに機械の必要をして益々缺くべからざらしむるに至るなり。アダムスミスは乃ち勞力の分業と機械の使用とは市場の廣狹に由りて制限せらるゝとを示したりと雖未だ更に重大なる二個の事實の存在を覺らざるが如し。二個事實の存在とは何ぞや。曰く第一市場の廣狹は世界の機械製造品の殆んど八割を消費する所の勞働者に由て定めらるゝと第二廉價なる生産の方法(機械)を使用し資本を貯蓄するとの經濟上必要を生ずるは眞正賃銀(レアル、ウエージ)(一日の勞働に由り得べき富の實地の額)騰貴し勞働の價昂進するの比例に應ずるとこれなり。

彼の偏私なる斷見は勞働者を以て獨り生産上唯一の要素となし彼等が消費に放ける最大要素たるを輕視するの誤謬に歸すべし。其の詰果として賃銀を以て市場に於ける需要及ひ購買力の元素として漸次に增加せざるべからざるを忘すれて却て減少すべきの費用とのみ思意したり資本家にして充分に此の事實を了解せば彼等は直に勞働運動上に於ける彼等の態度を一變し彼等經濟上の利益と繁榮とは竟に賃銀の騰貴と一致するを覺るべし。

賃銀を隨意に騰貴せしむるは資本家のなし能はざる所なりと雖彼等が享有する政治上社會上の勢力を此點に用ゆるは彼等の利益にして又義務なるを覺るべし眞正賃銀の騰貴は決して專斷人爲を以て左右し得ざるとを記臆せざるべからず眞正賃銀の騰貴は社會的勢力の知覺すべからざる運動に由るなり。其の運動や自然の軌道と行く時は微妙にして複雜なり複雜にして漸次なり故に決して社會に於ける經濟上の關係を紊乱するとなし。縱使賃銀騰貴の運動は幾んど知覺し難きか如く漸次に起りて微妙複雜なりと雖而かも積極侵取的なり。勞働者が資本家に對して賃銀增加の要求より起る第一經濟上の結果は資本家の利益の上に

壓迫と增加するものなれば、資本家は抵抗の寡き方向に運動を開始するは數理なり、乃ち資本家は製造品の價を騰貴せしめて以て其の壓迫を消費者の頭上に移さんと試むべし。消費者亦同一原理に由りて運動し其の生產品を買はざる乎又は節約するを以て資本家が物價騰貴に由りて得んとする所は是れを需要減少に失ふなり。若し之に反して資本家が賃銀增加の要求に抵抗せんと欲せば其の事業を停止せざるべからず。事業の停止は經濟上の損失にして社會の紛亂を含蓄す是れ最も怖るべく最も嫌ふべきものにして最後の手段たり。畢竟資本家は生產上改良機械を用ゐて商品を廉價に製造する乎或は其の利益を減ずる乎二者其の一を擇ぶの外なし。利益を減ずるは自家の滅亡を招くが故に、資本家は必ずや第一の手段に須たざるべからず。之を要するに勞働者は賃銀の增加を要求し、消費者は高價の物品を嫌惡する自利の法則よりして資本家は生產の手段として改良機械を使用するに至るべし。此の結果は社會的勢力の間斷なく漸次にして幾んど知覺すべからざる起動と反動とに由て到達せらるゝを以て、資本家は滅亡を免かれんが爲めの最後の手段なりとして嫌惡の念を以て事業の停止をなすが如きの愚を取らずして寧低抗寡き方向に運動して其の境遇を改良するは經濟上策略の愉快なるものとして此に出づべきなり。

如是資本家は不知不識の間幾多の危險を避け、前に說明したる漁者の場合に於けるが如く改良機械に其の資本を投じ寡少の費用を以て同額の富を生產するを得るに至る。斯くて資本家は其の利益を損ぜずして勞働者賃銀增額の要求に同意するを得るのみならず大に商品の價をも減ずるを得べし。是に於て乎資本家は其の生產物を以前より廉價に賣捌き先に消費するを得ざりし貧困者をして購求するを得せしめ、由て以て大に市場を擴め利益の割合を騰貴せずして其の所得を增すと同時に勞働の需要を增加するに至る。是れ改良生產機械の大に使用せらるゝに至りし所由にして、生產の機械として彼の鋤か鍬よりも廉に、草刈器械が大鎌よりも廉に、裁縫器械が針よりも廉なる所以の源理なり。彼の絹布毛布綿布が獸皮より廉なるも、瓦斯が燭火より廉なる亦皆然り、此の理を以てすれば英米に在りては非常に低價に富と生ずるの機械が何故に亞細亞諸國(單に我邦と云はずして爾ある能はざるかの理自から明なり。機械の使用は多數人民の消費額如何

に屬するは經濟上不動の法則なりとす。而かも機械使用の一般に普及する眞正賃銀一般の割合永遠に增加する時に在り、賃銀の增加は實に無職業者を絶ち貧困を減ずるの第一着手なりとす。故に貧困を永遠に滅絶するは各人に對する富の生産が增加する時に於て始めて之を望むべし。莊子曰く『夫水之積也、不厚則負大舟也無力、覆杯水於坳堂之上、則芥爲之舟、置杯焉則膠、水淺而舟大也』と。吾曹亦云はんかな、富の積るや厚らざれば則ち社會の貧困を救治するや力なし矣と。

富や元來涯りなし。天の蒼蒼たる其の厚くして至り極まる所なきが如くに涯りなし、而して資本や涯りあり。涯りあるを以て涯りなきを望むべかざるや論なし然りと雖資本のものたるや、涯りあるか如くにして而も限りなきに似たり。彼の貨幣經濟の時代に在りては個人孤立に傾くの弊として資本は貨幣若くは固定的富に限らるゝを以て其の資本や涯りあるが如くなれども、信用經濟の社會に在りては資本は貨幣若くは固定的富に限られずして一個無形の信用亦資本の一部分を構成す。此の資本や貨幣の作用をなさゞるか故に直に生産の上に使用し得ずと雖他方に於て貨幣若くは固定的富を供給す。マツカロツクやペリーが信用は一個の資本なりと云へりしが如き亦此の義に外ならず。故に曰く資本や涯りあるが如くにして涯りなきに似たりと。信用を本とする信用經濟の社會は、勞働者と雖企業力ある以上は信用の力によりて小資本を以て其の勞力を活動せしむるを得べく、隨て富の生産額を全社會の上に增大すると得べし。信用によりて零碎なる小資金と雖是れを有益に消費するとを得る時に於て始めて市場に於ける需要及び購買力が浪費と奢侈を相去るなり。彼の高價なる賃銀は奢侈に浪費せらるといふは信用經濟を知らざる者の杞憂と云はざるべからず。

第四章　信用と保障

信用は生産を助く。信用の偵偵。信用濫用の弊。經濟上の一大恐慌。辯に惑ふの俗。信用保障。信用經濟の不備。株式會社の監査役。公共監査機關の必要。監査は獨立ならざるべからず。信用經濟の發達を助長せ。社會經濟の大計。

信用の生産を助くるは猶ほ和順の氣候が生産を助くるに似たり。五風十雨の價は數字を以て之を算出するとの難きと同じく、信用の價亦數字を以て之を明示すると難し、然りと雖二者共に生産を增加するは爭ふべからざるの事實なりとす、信用の社會經濟を利するや夫れ是の如し。

過ぎたるは猶ほ及ばざるに如かず。信用を利用するとの餘りに容易に過ぐる時は、濫用の弊是に起り、却て無用の消費を奬勵して資本を不生産的に減少し、延て經濟上の一大恐慌を惹起するをなしとせず。是れ實に信用經濟に伴ふ所の弊害にして、其の行はるゝと愈々廣ければ其の害の及ぶ所益々深く、竟に社會經濟を混亂す。

莊子曰く「知詐漸毒、頡滑堅白解垢異同之變多則俗惑於辯矣、故天下每每大亂」と。吁是れ信用濫用の弊を道破したる者にあらずや。顧み思ふに、今の經濟社會は知詐漸毒の社會なり、頡滑堅白解垢異同の變多き社會なり。巧利の俗。奚ぞ役役の辯に惑はざるめや。而も其の惑ふや頡滑解垢堅白異同の變を監査識別する機關の存せざるに在り。更に復言へば信用に關して信頼すべき保障の存せざるに在り。

是れを信用經濟の一大不備となす。

信用を說く者、近者其の人に乏しからず。然りと雖彼の信用保障の制を設くるとなくして漫に信用經濟の發達を望むは百年河清を俟つの愚なり。偶々株式會社の如き監査役なる者ありて監査の精確を計ると雖、固より株主の利益とのみ代表する者なるが故に、其の監査や未だ以て社會公衆に對する信頼の保障となすに足らざるなり。信用の公共保障は、社會公衆の信頼によりて其の業を維持する獨立の監査機關に須たざるべからず。所謂獨立の監査機關とは、監査をなす者が監査を受くる者と全然關係なきの地位に置かるゝを云ふなり。我邦由來此の種の機關備はらざりしを以て信用の發達は往往にして阻害せられ、經濟社會は每每として混亂す。察せざるべからず。是れを社會經濟の爲めに計るに、今の時に方り信用監査の機關を起して頡滑解垢堅白異同の權變を監査識別し、社會公衆をして已

がじゝ信頼する所と知らしめ彼の『或於辯』の時弊を濟ひ信用經濟の發達を助長するは蓋し無益の業にあらずと信ずるなり。

信用經濟論 大尾

明治參鈴五年七月七日印刷
明治參拾五年七月十三日發行
明治參拾七年七月卅一日再版

信用經濟論
定價金貳拾五錢

不許複製

著作者　小林肱水

發行兼印刷者　多部田要藏　東京市芝區南佐久間町一丁目三番地

印刷所　近藤商店　東京市京橋區日吉町十番地

發行所　東京府荏原郡品川町大字南品川字利田新地七番地　勞働新聞社

週刊

勞働新聞

（資本と働の勞と兩盛全）

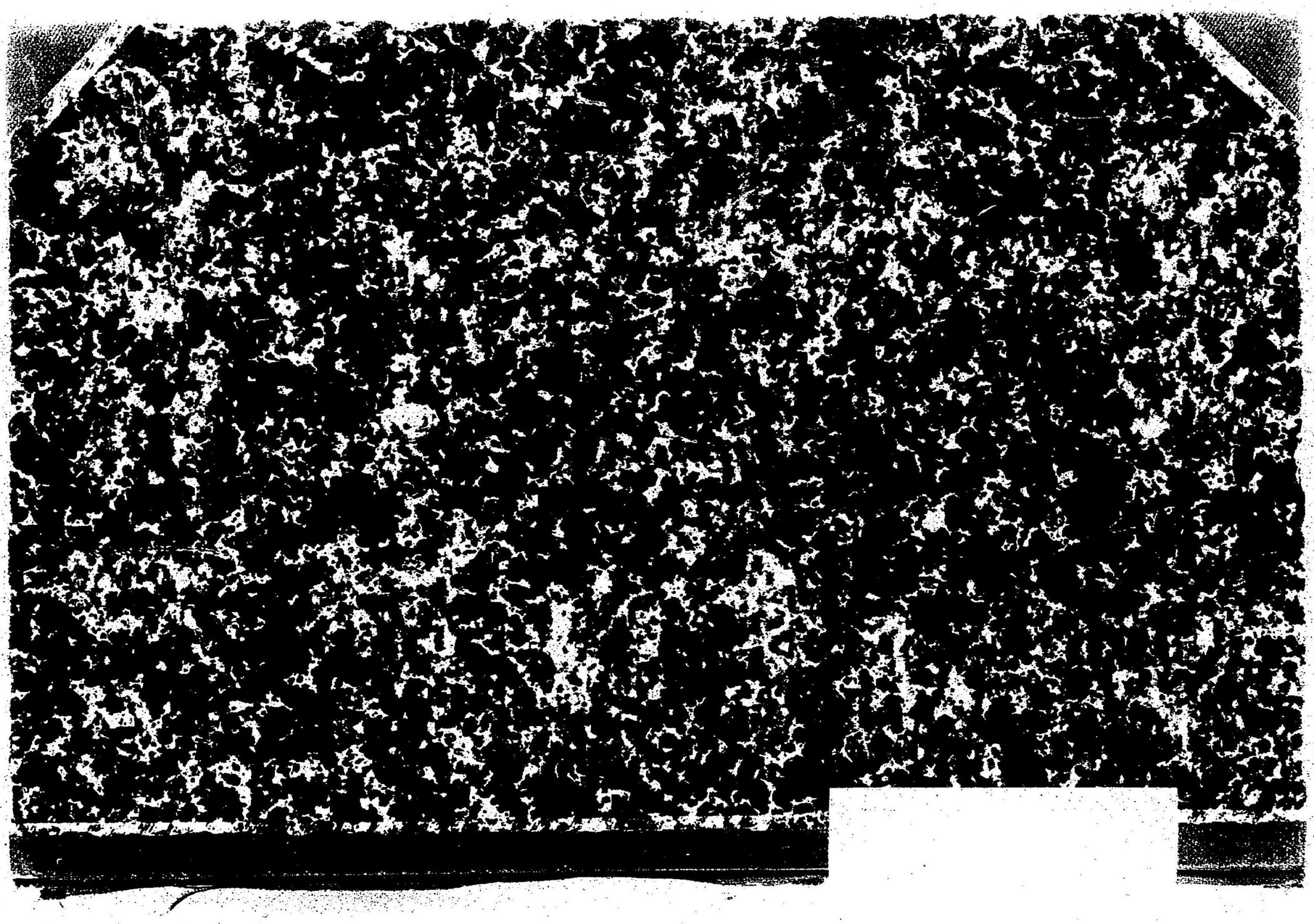
"Live and let live"

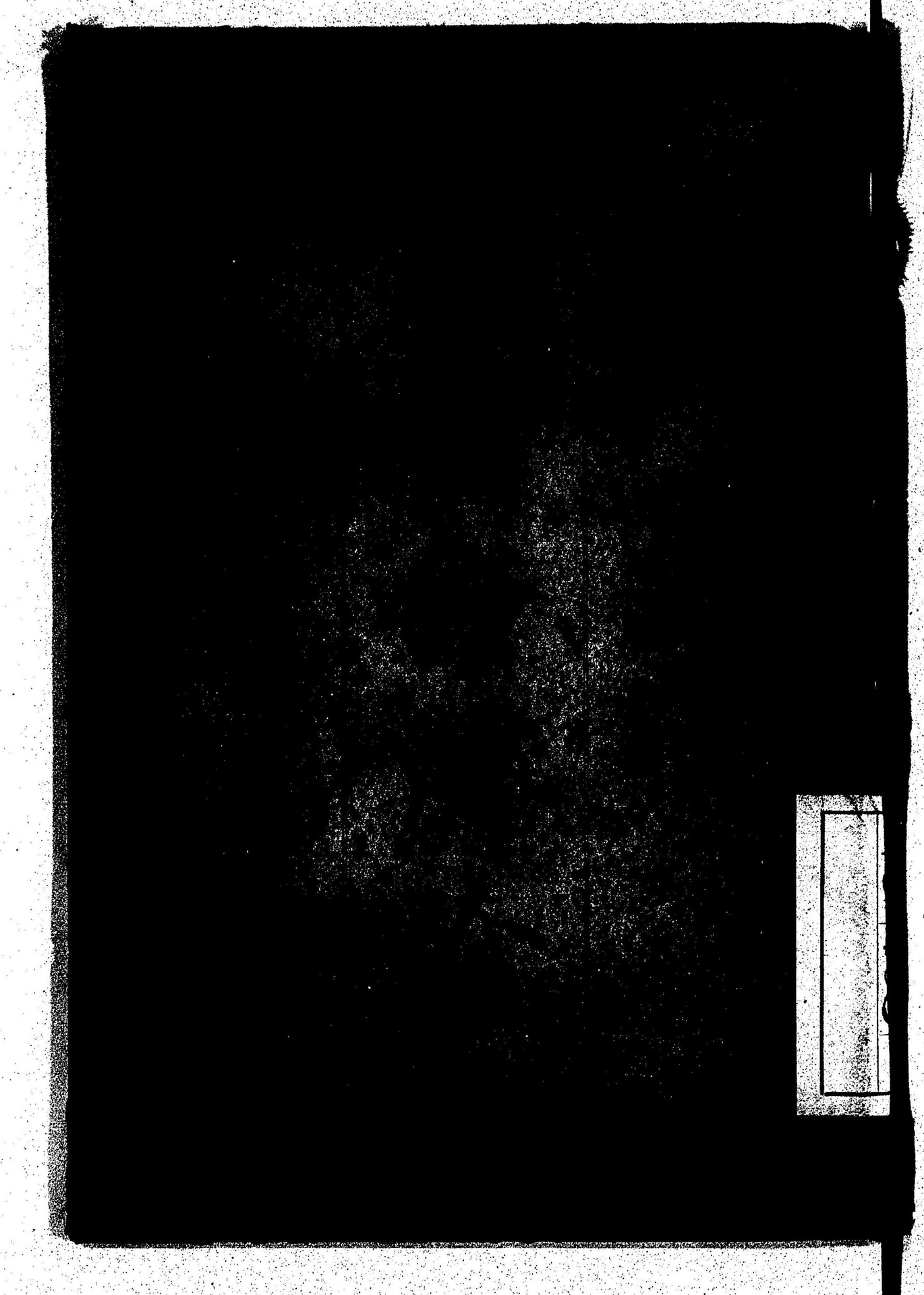
定價壹枚金貳錢五厘
郵稅壹枚に付金五厘
廣告料一行金拾五錢

東京市京橋區新橋二丁目三番地
勞働協會
電話七三七九番

今や我帝國は世界の大國たる露西亞と戰を交へ多數の國民は兵馬倥偬の爲に忙殺せられて幾んど他を顧みるの餘裕なからんとす。然れども國家の財源は國民の富力に在り。國民の富力は殖産興業に待つべきは戰時と雖も敢て渝るの道理なく、却て倍々生殖を勵まざるべからざる者あり。且つ夫れ戰爭の終期の何時なる乎又如何なる條件の下に平和の克復さるべき乎は吾人これを知らずと雖も戰爭一たび歇みて平和の克復したる曉は世界に於ける政治的局面は云はずもがな、商業貿易其の他産業上に於て一大變遷の來るべきことは豫め期待せざる非常なる劇變に逢著すべく即ち國際的及び經濟的方面には健全なる國家の發達に待たざるべからず。此の間に處して以て終局の勝利を制せんには健全なる國家の發達は國民の富力は待たざるべからざるや論なし。而かも國民富力の存養は資本勞働の健全なる國家の發達は國民の富力は待たざるべからざるや論なし。而かも國民富力の存養は資本勞働の調和を措て他に適者あるを見ず。夫れ然り、爾あれど資本勞働の調和は机上の空論にあらずして實際の問題なるが故に吾人は生平に於て社會經濟の學理を咀嚼し機に臨みて之を實際に應用するの用意なかるべからず。これ先年同志を相會して『勞働協會』を組織したる所以にして所謂『勞働新聞』は其の機關紙なり。此れを以て其の說く所は勞働と資本の調和を主題とすと雖も、兼て勞働と國法の關係、勞働と社會の關係、勞働と衛生の關係、勞働と教育の關係、勞働者の現狀（生活境遇）及び海外諸國に於ける勞働狀態等に關する精確委曲なる事實上の調査報道を收錄す材料豐富なりと雖統計的事實に重きを置くの結果或は趣味に缺くる所あらん然れども有益の文字たるを失はず。資本家も勞働者も共に行餘の一讀を値す。

79
406





３１０６２８－０００－０
７９－４０６

信用経済論

小林 肱水　著